歌集

冬庭

昭和四十二年十月一日　発行©

定価　六百円

著者　原口はる（はらぐち）
川口市宮町二八〇番地

発行者　佐藤志満

発行所　歩道短歌会
東京都港区南青山三丁目
八番二十七号

船舶印刷・富士製本

歌　集

冬　庭

原口はる

歩道叢書第63篇

歩道短歌会

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

序

原口はるさんが今回、歩道叢書第六十三篇として、歌集「冬庭」を刊行されることは、私にとつても大きな喜びであり、心からのお祝を申上げる。原口さんは私が元大日本麦酒株式会社目黒工場長勤務時代、十七年間に及ぶ同僚であつたが、又作歌といふ一つの道にいそしみ合つた歌友でもある。そのやうな因縁から分を超えて、求めらるるままに賛言をつらねて、歌集の刊行を祝福するのである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

原口さんが目黒工場内の私達の短歌会白妙会に入会されたのは、昭和二十二年頃のことであるが、それ以来引続き今日に至つてゐるのである。白妙会については先に、新倉和子さんの歌集「山霧」の序文の中でもふれたのであるが、会名は即ち佐藤佐太郎先生の歌集名によるもので、最初から佐藤先生の御篤切適切な御指導を仰いだのであるが、それは私達にとつて極めて幸福なことであつた。歌集の刊行は白妙会員としては、原口さんは三人目であるが、白妙会がこのような収穫を得たことは、一つに佐藤先生の温い御指導の賜に外ならない。この機会に私は著者と共に、佐藤先生並びに常に陰に陽に私達をお導きいただいた志満夫人に対し、改めて衷心よりお礼を

申し上ぐる次第である。

原口さんは、学生時代武島羽衣先生の講演を聞かれ、その頃から短歌に対し強い憧れを持つてゐたと述べて居られるが、そのやうな素質はともかく、白妙会員としても最も熱心、勤勉な会員であつて、後年会社を退かれ居を川口市に移されてからも、歌会にはかかさず出席され、只管作歌の道にいそしまれた。そのやうな永年に渉る努力精進が今日の歌境に導かれたものと思ふのである。

それは歩道同人のすべてに通有なことであるが、原口さんも亦常に写生の本道を守り、精細な観察によつて対象を適確に把握し、詩情を詠ひ上げてゐる。そして身辺の雑事、旅中詠等にも沢山の秀歌佳作を見るのであるが

私はそれ等について卑見を述べる才ではないので、それ等の吟味批判はすべて読者にゆだね、私はここに特に数首を再録する。

節分の豆を煎りつつ想ひゐる夫をたのみて十余年経し

隣家の枸杞の実あかく照る夕べ夫の言葉を再び想ふ

これは歌集巻頭の二首で昭和二十六年の作中に収められてゐるが、家庭の夫人として心みち足りた幸福な生活を想ふのである。然るに原口さんは昭和三十七年最愛の夫君を失はれたのである。誠に哀悼の情に堪へないのであるが、その悲みを次の如く詠じられてゐる。

死に近き夫が握りし手のひらに汗た
まりゐて冷たかりけり
物言へど言葉にならず死にゆきし夫
の骸に残るぬくもり
線香の香ただよふ部屋うちに目覚め
し吾の体がふるふ
霜のため傷みしばらの蕾など夕ぐれ
てゆく庭に光れる

尚春秋に富む身を以つて夫君に先だたれた悲みは如何ばかりであられたか、くりかへし誦読するに堪へない思ひであるが、これ等の挽歌についても云へることは、只感傷に堕することなく、その把握は極めて的確である。

三十八年の作品中では

鹿沼土買ひ来て夫のせし如く菊の芽

ざしに短日終る

油虫つきたる菊に殺虫剤かけつつ居

れば夫の居る如し

等々がある。なき夫君を偲ぶ切々たる心情はとこしへに消ゆることはないであらう。著者も夫君なき後、波瀾多き生活にあつて、短歌は唯一の心の支へとなつてゐると述べられてゐるが、只一つの心の支へさへもたれることはせめてもの幸福と思ふのである。今後一層健康に留意され、歌集刊行を契機として更に作歌に精進されんことを祈る次第である。昭和四十二年八月一日　松山茂助。

目次

序　松山茂助

昭和二十六年

Ⅰ 枸杞の実……一八
Ⅱ 麦……一九
Ⅲ 墓標……二〇
Ⅳ 棚雲……二一
Ⅴ 奥日光……二三
Ⅵ 公孫樹葉……二四
Ⅶ 移居……二五

昭和二十七年

Ⅰ 砂洲……二八
Ⅱ カトレヤ……二九
Ⅲ 山の蝶……三〇
Ⅳ 梅雨……三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅴ 渚……三三
Ⅵ 浚渫船……三四
Ⅶ 笹原……三六
Ⅷ 路地……三七

昭和二十八年

Ⅰ 葬列……四〇
Ⅱ 風音……四一
Ⅲ 群……四二

昭和二十九年

Ⅰ 雪……四六
Ⅱ 御苑……四七
Ⅲ 夕映……四八
Ⅳ 湯丸山……四九
Ⅴ 青実……五〇
Ⅵ 虹……五一
Ⅶ 高原の霧……五三

昭和三十年

Ⅰ 雨の夕……五六
Ⅱ 音……五九
Ⅲ 海草……六一
Ⅳ 蛾……六二

Ⅴ 松山鐘乳洞 …… 六三
Ⅵ 裏磐梯 …… 六四

昭和三十一年

Ⅰ 鼠 …… 六八
Ⅱ 妹 …… 六九
Ⅲ 空地 …… 七〇
Ⅳ 果実 …… 七二
Ⅴ 金精山 …… 七四
Ⅵ 那須山（その一） 七五
Ⅶ 尾瀬ケ原 …… 七七
Ⅷ 木立 …… 七九

昭和三十二年

Ⅰ 犬蓼 …… 八二
Ⅱ 残雪（小河内） …… 八三
Ⅲ 柳瀬川 …… 八五
Ⅳ メーデー …… 八六
Ⅴ 菅平高原 …… 八七
Ⅵ 浮標 …… 八九
Ⅶ 那須山（その二） 九一
Ⅷ 蹄の跡 …… 九二
Ⅸ 水田 …… 九三

昭和三十三年

Ⅰ 三溪園……九六
Ⅱ 機音……九七
Ⅲ 目黒自然公園……九八
Ⅳ 熔鉄……九九
Ⅴ 雨雲……一〇〇
Ⅵ 浮草……一〇一
Ⅶ 稲の花……一〇三
Ⅷ 出水（台風二十二号により緑川氾濫す）一〇四
Ⅸ 唇……一〇六

昭和三十四年

Ⅰ 寒き庭……一一〇
Ⅱ 冬日……一一一
Ⅲ 斑雪（志賀高原）一一三
Ⅳ 曇日……一一四
Ⅴ 春疾風……一一五
Ⅵ 春逝く……一一六
Ⅶ 瀬戸内海……一一八
Ⅷ 西芳寺……一一九
Ⅸ 夏日……一二〇
Ⅹ 那須山（その三）一二一
Ⅺ 上高地……一二三
Ⅻ 山茶花……一二五

昭和三十五年

Ⅰ 飼犬……一二八
Ⅱ ゲレンデ……一二九

Ⅲ 家鴨……一三一
Ⅳ 水族館……一三二
Ⅴ 亡犬……一三三
Ⅵ 中尊寺……一三四
Ⅶ 庭土……一三六
Ⅷ 稲妻……一三九
Ⅸ 埋立地……一四〇
Ⅹ 飼猫……一四二

昭和三十六年

Ⅰ 夜間スキー……一四六
Ⅱ 亡兄……一四七
Ⅲ 灯……一四九
Ⅳ 早春……一五〇
Ⅴ 蓮田……一五二
Ⅵ 作業……一五三
Ⅶ 泥……一五五
Ⅷ 五十里湖……一五六
Ⅸ 夕映……一五七
Ⅹ 水音……一五八

昭和三十七年

Ⅰ 海鳥……一六一
Ⅱ 丘……一六三
Ⅲ 木蓮……一六五
Ⅳ 鷺山……一六七
Ⅴ 蛙の声……一六八
Ⅵ 蟬……一七〇

Ⅶ 富士山道……一七一
Ⅷ 仔猫……一七三
昭和三十八年
Ⅰ 身辺……一七八
Ⅱ 鹿沼土……一八〇
Ⅲ 人声……一八二
Ⅳ 稚魚……一八三
Ⅴ 夏草……一八四
Ⅵ 歳晩……一八六
Ⅸ 急死……一七四
昭和三十九年
Ⅰ ふるさと……一九〇
Ⅱ 犬猫猿……一九一
Ⅲ 荒川……一九三
Ⅳ 春日……一九四
Ⅴ 磯……一九五
Ⅵ 腐れ柿……一九六
Ⅶ 蔵王……一九七
Ⅷ 水槽……一九九
Ⅸ 聖火……二〇〇
Ⅹ 日常……二〇一
Ⅺ 象……二〇三
Ⅻ 雄犬……二〇四
昭和四十年

Ⅰ 妊る犬……二〇八
Ⅱ 植木……二〇九
Ⅲ 三原山……二一〇
Ⅳ 日々……二一三
Ⅴ 木洩日……二一四
Ⅵ 立秋……二一五
Ⅶ 浅き池……二一六
Ⅷ 休日……二一八
後記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com